



Title	外交関係樹立以前の日本モンゴル民間交流と春日行雄 : 1966年の墓参を手がかりとして
Author(s)	Munkhchuluun, Munkhzul
Citation	グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 109-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外交関係樹立以前の日本モンゴル民間交流と春日行雄

—1966年の墓参を手がかりとして—

Munkhchuluun Munkhzul (日本学・M1)

1. はじめに

1945年8月、ソ連が日本に宣戦布告した際、モンゴル人民共和国も宣戦布告し、モンゴル軍はソ連軍とともに関東軍と戦った。その結果、満洲や朝鮮半島北部などに入植・駐留していた人びとの多くが、戦後長きに渡って抑留された。この抑留は、日本では一般に「シベリア抑留」と呼ばれているが、この際には、1万をこえる人びとがモンゴルで抑留された。この人びとは、1945年から47年にかけてまる2年間モンゴルに留め置かれ、そのうちおよそ1600人が帰国することなくモンゴルで命を落とした。

モンゴル抑留から約20年後の1966年、抑留者遺族のモンゴル墓参が実現した。墓参実現をきっかけとして、シベリア抑留に比べて記録が少なく、不明瞭な部分の多かったモンゴル抑留の実態や、モンゴル国の状況が日本人の人びとにも知られるようになった。そして、このモンゴル墓参は、両国が外交関係を結ぶ必要性への認識を高め、1972年の外交関係樹立にも寄与した。

モンゴル墓参実現に力を尽くした人物として挙げられるのは、春日行雄(1920~2010)である。彼は満州国で日本軍の軍医として働いていた人物であるが、満洲国に侵攻したソ連・モンゴル連合軍にとらえられ、1945年から47年にかけてモンゴルで抑留された。

本発表では、1966年のモンゴル墓参に注目することにより、外交関係樹立以前の日本とモンゴルの民間交流に光をあて、どのような人びとが、どのような課題意識を抱いて、何に取り組んだのか、また、その結果何が達成されたのかを明らかにする。

抑留の研究は、これまで主にシベリア抑留が注目されてきたが、近年ではモンゴル抑留の研究も進展している。最新の研究として、ボルジギン・フスレ(2024)やUrangua & Erdenebileg(2018)が挙げられる。ただし、これらは外交関係や政治史を中心としたもので、墓参に関する部分は限られている。本発表では、抑留経験を基にした民間レベルの国際交流、とりわけ墓参運動に焦点を当てる。

具体的には、まず第1節で、上記の重要人物春日行雄におけるモンゴル抑留の経験を概観する。第2節では、春日行雄の墓参実現に向けた活動に検討を加え、彼が果たした役割を明らかにする。そして第3節では、外交史料を手がかりとして、墓参の実現過程を跡づける(主として、第1節・第2節の分析は春日の著作に基づき、第3節の分析は日本外交史料館・モンゴル国立公文書所蔵の史料に基づく)。

2. 春日行雄とモンゴル抑留

まずは、春日行雄の前半生を彼の著作を踏まえて整理する。春日、1920年に島根県に生まれた。子供の時から大陸に憧れていた春日は、1939年に内モンゴルへ渡り、現地でモンゴル語、ロシア語などを学んだ。その後、1941年から45年にかけてハルビン郊外の満洲国陸軍軍医学校で学び、卒業後には軍事病院で勤務した。

1945年8月17日に、ソ連・モンゴル連合軍が満洲国に入り、日本軍が敗れたことで、満州国にいた在留日本人は軍人も民間人も捕虜となり抑留された。この抑留者のなかに、春日も含まれていた。

抑留についての近年の研究である富田(2016)によると、モンゴルは労働使役に集中し、ソ連に比べると政治教育はなかった。モンゴルでは気候が厳しく物資不足も深刻で、死亡率もシベリアより高かったとされる。また、死亡した抑留者はウランバートル郊外の墓地に埋葬されており、多くの遺体が遺棄されたシベリア抑留とは異なる特徴もあった(富田、2016: 158-161)。

春日のモンゴルにおける体験は、一般的な抑留者の体験とは大きく異なるものであった。第一に、春日はモンゴル

語が話せる軍医として、モンゴル兵士や地域住民と接する機会を多くもっていた。軍医という立場を活かして、モンゴルの病院で副官を務めた春日は、抑留者たちの死体を解剖するだけでなく、墓標を立てて、丁寧に埋葬した。死亡者の埋葬にあたっては、蒙古側は遺体を遺棄する場所として「谷間の蒙古人の骸骨が散乱する「風葬場」を考えていた」が、春日らは「「日本人の習慣」を強調したのでウランバートルの街が見おろせる、流水の恐れもない丘の中腹に埋葬」(春日, 1969: 82)することができたという。

また、春日は病院の外での診察も担当していたため、抑留者の死亡者の数や名前、埋葬場所、死亡原因などについて詳しい情報をえることができ、なおかつ詳細な記録を残していた。この記録が、後になって、死亡者の墓を特定する際の重要な手がかりとなる。

以上のように、春日は、抑留者としての立場にありながらも、語学力や軍医としての知識・技術を活かして、さまざまな局面において、日本人抑留者たちとモンゴル側との調整を担っていたことが、わかる。

3. モンゴル墓参実現に春日行雄が果たした役割

次に、帰国後の春日がモンゴル墓参の実現に向けてどのように取り組んだか、その活動を、春日本人の著作や、春日が中心になって発行した雑誌『日本とモンゴル』を基盤として、見てみよう。

1947年10月、モンゴルに抑留されていた1万705名の人びとが、日本に送還された¹。帰国から一年が過ぎた頃、春日は抑留者の遺族から次々と手紙を受け取る。最初の手紙は、同じくモンゴルで抑留されていた者の母親、次は、夫の居場所をたずねる婦人から、春日に協力を求めたものであった。これらに対して春日は自分が持っている情報を共有することで力になろうとした(春日, 1988 : 242)。それ以外にも、春日は、収容所病院の副官として得た情報などを活用し、モンゴル抑留の実態を伝えるための日本人抑留図、日本人墓地図、抑留記録などの資料を多く作成した。それらの一部をあげるなら、1950年の著作『生命ある灯』で紹介された外蒙死没者の実態、1962年に作成したレポート『厚生省援護局調査課にて外蒙における死亡、埋葬者の実態確認と打合せ』(加倉井寛、貫洞正也)、1963年に作成したレポート『1945年～1947年における蒙古人民共和国の建設と日本人一六、〇〇〇人の位置』などを挙げることができる。これらの資料は、遺族や一般市民が抑留の実態を知る機会を与えるとともに、後に日本政府やモンゴル政府が墓地の特定を進めるうえで、有意義な手がかりにもなった。

1964年に春日は満州国の軍人やモンゴル研究者などを含む16名のメンバーとともに日本モンゴル協会を設立し、理事長の秘書を務めた²。翌年の1965年、春日と日本モンゴル協会は抑留者遺族とともに、墓参運動の声を日本政府に届けるため、当時の総理大臣・佐藤栄作宛に「外蒙古墓参実現方陳情書」を提出した。陳情書には、たとえば次のような訴えが見られる。「この十八年間、『晴の回向』を実現することなく、今日に至りました。南方諸国、あるいはソ連各地への墓参の報道を見聞するにつけ、未だに墓前での誓約を果し得ない私たちは、断腸の思いであります」(春日, 1988: 252)。

陳情書の作成に関わった春日にとって、モンゴル墓参は、抑留中に亡くなった人びとに対する慰靈であるとともに、まだ国交が開かれていない日本とモンゴルの架け橋を築くための民間交流事業という、きわめてアクチュアルな意義を帯びた営みでもあったのである。

4. 初めてのモンゴル墓参

本節では、日本・モンゴル両国の公文書館や外交史料館が所蔵する史料を検討することで、モンゴル墓参実現の過程を考察する。

まず、モンゴル側の公文書を参照して、墓参実現以前に、埋葬された抑留者の遺体が現地でどのように扱われていたかを確認する。モンゴル国立公文書館所蔵の史料によると、モンゴルで没した抑留者のうち、墓地が特定された1597名は、ウランバートルをはじめ16ヶ所に葬られていた³。モンゴル側は、1962年に日本人墓地の環境整備を行った⁴。

¹ モンゴル国立公文書館「Улаан загалмайн нийгэмлэгийн баримт 1966」書誌番号 383-1-238, p. 4.

² この情報は、松崎 編(1965)のなかの記事「日本とモンゴルの動き」による。

³ モンゴル国立公文書館「Олзлогдсон цэргийн хэрэг эрхлэх газрын баримт 1945-1947」書誌番号 273-1-105, p.19

⁴ モンゴル国立公文書館「Олзлогдсон цэргийн хэрэг эрхлэх газрын баримт 1945-1947」書誌番号 283-1-238, pp.4-5

一方、日本側では、遺族からの相談を受けた春日が日本赤十字社に相談し、日本赤十字社からモンゴル側に墓参を提案していたが、交渉が進まず、実現に至ることはなかった。この時点ではまだ、日本政府とモンゴル政府は直接交渉する機会もなく、抑留者に関する情報交換や墓参の交渉は赤十字社や未帰還協会を通じて行われていた。

日本の外務省が駐ソ大使館を通じてモンゴル政府に抑留者の遺族による墓参を提案したのは、1966年3月のことである。翌月、モンゴル政府は、日本人墓地に日本より墓参団を受け入れるという趣旨の回答を出した。ただし、日本政府は、モンゴルとの国交の正常化については消極的であり、墓参問題は外交関係樹立とは別問題であると認識していた⁵。こうしてモンゴル墓参は、国交が開かれていなかった両国の人びとによる民間交流事業として実現することになった。

モンゴル政府の許可を得た墓参団は、同年の8月24日～29日にかけてモンゴルを訪問し、モンゴル政府の協力のもと、日本人墓地を訪問した⁶。墓参団には抑留者の遺族8人、国会議員、外務省・厚生省の職員、新聞記者と春日行雄といった17名が参加し、遺族たちは、亡くなった家族が埋葬された地に立つことで、悲しみと同時に安堵の思いを抱いた。春日は墓参団体に私費で参加し、墓参団団長秘書として19年ぶりにモンゴルを訪問した。

当時の新聞記事を参照すると、墓参団に参加した遺族は、現地で、「私は生きているむすこに会いたかった」（墓参団団長 坂田幸三郎(62)）、「日本に帰ってもひとりぼっち。食事さえ口にあえればモンゴルで暮らしたい」（兵庫県 蕁坂美智子(22)）といった感慨を抱いたことを確認できる。

5. おわりに

本発表では、モンゴルでの日本人抑留と、その後の墓参実現に向けた春日行雄の取り組み、さらには初めての墓参が実現するまでの外交史的な経緯などについて見てきた。冷戦の対立が激しかった当時の、春日行雄の取り組みや、抑留者遺族のモンゴル墓参実現は、戦争が生んだ深い溝を埋め、日本・モンゴル両国の相互理解と和解を進める重要な節目であったといえる。

とくに、モンゴル抑留に関する記録が少ないなか、春日行雄がみずからの体験をもとに資料を作成し、遺族の声を代弁して墓参運動に尽力したことは、非常に大きな意義をもつ。その活動は、戦争で犠牲となった人びとの記憶を掘り起こし、遺族が抱えていた悲しみを癒す一助となった。また、1966年の墓参の実現は、長年愛する人びとの行方を知らず、苦しみを抱えていた遺族にとってだけでなく、かつて交戦国だった日本とモンゴル両国にとっても、民間交流を通して緊張関係を乗り越えようとした点で、重要な意味をもつ出来事であった。抑留者遺族のモンゴル墓参実現という歴史は、国際社会におけるさまざまな局面で政治的な緊張関係が高まっている現代において、文化外交の可能性を示唆する出来事であるといえよう。

参考文献

- ボルジギン・フスレ (2024).『日本人のモンゴル抑留の新研究』三元社
春日行雄 (1969).『蒙古から来た男—猛烈医者の履歴書』芙蓉書房, 82.
春日行雄 (1988).『ウランバートルの灯みつめて五十年』モンゴル会, 282.
松崎陽 編 (1965).『日本とモンゴル』創刊号, 日本モンゴル協会.
モンゴル国立公文書館 「Олзлогдсон цэргийн хэрэг эрхлэх газрын баримт 1945-1947」書誌番号 273-1-105, 19.
モンゴル国立公文書館 「Олзлогдсон цэргийн хэрэг эрхлэх газрын баримт 1945-1947」書誌番号 283-1-238, 4-5.
モンゴル国立公文書館 「Улаан загалмайн нийгэмлэгийн баримт 1966」書誌番号 383-1-238, 4.
モンゴル国立公文書館 「Улаан загалмайн нийгэмлэгийн баримт 1976」書誌番号 383-1-97, 51-52.
日本外交史料館「日・モンゴル外交関係外交樹立 1959～1966」書誌番号 2008-0070.
富田武 (2016).『シベリア抑留—スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』中公新書, 158-161.
Urangua, J.,&Erdenebileg, B. (2018). *Дайны золхиос болсон хүмүүс: 1945–1947 онд Монголд байсан Япончууд*.
Монгол Улсын Их Сургууль.
「モンゴル墓参団帰る—“異国の丘”で供義を終えて」 『朝日新聞』1966年8月31日 朝刊, 14面.

⁵ 日本外交史料館「日・モンゴル外交関係外交樹立 1959～1966」書誌番号 2008-0070

⁶ モンゴル国立公文書館「Улаан загалмайн нийгэмлэгийн баримт 1976」書誌番号 383-1-97, pp.51-52